

軽度発達障害児の授与動詞獲得に関する指導

—「くれる」「あげる」課題場面について—

Teaching of the Giving and Receiving Verbs for Student with Developmental Disabilities :
Training of the 「Kureru」 and 「Ageru」 Verbs

○江上 弘晃*・藤金 倫徳**・相澤 宏充**

Hiroaki EGAMI*, Michinori FUJIKANE** and Hiromitsu AIZAWA**

(福岡教育大学大学院教育学研究科* 福岡教育大学特別支援教育講座**)
(Graduate school, Fukuoka University of Education* and Department of Special Education,
Fukuoka University of Education**)

Key words : giving and receiving verbs, developmental disabilities, stimulus control

I. はじめに

授与動詞を使用した文章は、主語と物品の移動方向が決まれば、それに対応した適切な授与動詞が決定される。例えば他者である「A 君」と対象児本人である「私」が描かれた絵で、「A 君」がりんごを持って「私」へ渡そうとしている時、物品の移動方向は「A 君」から「私」である。「A 君」が主語の場合、「A 君が私にりんごをあげる」という文章ではなく、「A 君が私にりんごをくれる」という文章が構成される。

本研究では、登場人物二名のどちらか一方に物品を持たせ、いま一方へ渡そうとしている絵と、「A 君が私にりんごを（ ）」等と動詞以外が書かれた文章を読み、文末に「あげる」「くれる」「もらう」の選択肢の中から一つを記述するように求めた。登場人物は二名とも「他者」「他者」と対象児本人である「私」が書かれたものを用いた。

ところが「くれる」が正答の問題において、「私」が右側に描かれている場合と左側に描かれている場合とで正答率に違いが見られ、「私」が右側に描かれている時に「あげる」と記述して誤答することが多かった。これは絵刺激上の「私」の位置を手がかりとして「くれる」「あげる」を選択している可能性があると考えられる。

そこで本研究は、「くれる」「あげる」を選択するための条件刺激として機能していた絵刺激上の「私」の位置を、物品の移動方向を条件刺激として「くれる」「あげる」を選択できるように転移させることで「くれる」「あげる」の獲得を行った。そして、物品の移動方向が条件刺激として機能していれば、その対称律の関係で物品の移動方向と動詞を弁別刺激として名詞と助詞である「A 君が私にりんごを」の部分が記述可能になると推測されるため、その確認を行った。

II. 方法

1. 対象児

対象児は軽度発達障害と診断された女生徒で、訓練開始当時、高等学校1年生であった。

2. 方法

1) 標的行動 物品の移動方向を条件刺激として「くれる」「あげる」を記述することができることを標的行動とした。

2) 手続き

ベースライン (Session1~2) 訓練者は対象児へ、登場人物が両方とも他者同士の物品の受け渡し、右側が私で左側が他者、右側が他者で左側が私の物品の受け渡しが描かれた絵と「A 君が私にりんごを（ ）」等と書かれた文章を見せ、文末の空欄へ選択肢「あげる」「くれる」「もらう」の一つを記入するように求めた。正反応か否かに関わらず外的な強化操作は行わなかった。

介入① (Session3~5) ベースラインと同様の問題を用いて、空欄へ選択肢「あげる」「くれる」「もらう」のうちの一つを記入するように求めた。その際、訓練者は対象児が問題を解く前に絵中に物品の移動方向の矢印を記入するように求めた。移動方向の記入指示は徐々に提示時間を遅延させた。正反応に対しては言語賞賛を行い、誤反応に対しては、登場人物の位置と物品の移動方向、「あげる」「くれる」「もらう」が書かれたヒントカードを見せながら修正を求めた。また、Session5以降では正反応の場合であっても、ランダムに「本当にそれでいい?」と答えに対する確認を行った。正反応に対しては言語賞賛を行い、誤反応に対しては「書き直す前の答えの方が正しかったよ」「正解だったんだけど聞いてちゃっ

た」と言い、修正を求めた。

介入② (Session6) これまでの訓練で用いた絵と、「あげる」「くれる」「もらう」のどれか一つが書かれた問題を見て、「A 君が私にりんごを」等の名詞と助詞にあたる部分を記述するように求めた。正反応に対しては言語賞賛を行った。

3. 分析

訓練場面は VTR 録画をしているため、所定の用紙を用い、2名の観察者で分析した。観察者間の一致率は100%であった。

III. 結果および考察

結果は Fig.1 に示すとおりであった。ベースラインより、私が左側に描かれた絵で「くれる」を記述する試行では、Session1で0%、Session2で10.5%と低い正答率であった。ところが私が右側に描かれた絵の場合、「くれる」は比較的高い正答率を示したことから、私が左側に居る時に「あげる」を選択するという位置偏向性が見られた。したがって「あげる」が高い正答率を示していたとしても、適切に選択できているかどうか判断するのは難しい。

そこで介入①を実施した。その結果、Session5では「くれる」において100%の正答率が見られた。しかし、「くれる」の正答率が高まると、「あげる」「もらう」の正答率が減少傾向にあることから、まだ安定して授与動詞を記入できているとは言い難い。

更に Session5 以降では対象児が書いた答えが正解であっても、「本当にそれでいい?」と記述した答えに対する確認をランダムに行った。その結果、「くれる」が正答であっても、それ以外の「あげる」や「もらう」を記述する反応が見られた。これは訓練者の確認という音声言語の刺激機能が物品の移動方向よりも高い刺激性制御を帯びている可能性があることが要因として考えられる。しかし、修正を求める介入を行うことで、正答の場合に訓練者が確認しても書き直すという反応は起こらず、「物品の移動方向がこっちで、主語が私だから正解だと思います」という正答の理由を説明する反応が生じるようになった。

そして、Session6 では全て100%の正反応率が見られた。したがって、本指導が有効であったと言える。

